

核兵器の廃絶を願って

語り手

海老澤

一 巳

大和二丁目

私は一九一七（大正六）年に現在の中野三丁目郵便局の裏で生まれました。私が生まれた頃、今の区役所・税務署の所には中野通信隊があり、早稲田通りと線路の間あたりに、細長く阿佐ヶ谷駅付近まで練兵場がありました。毎日通信柱を建て、そこで電線を担いだ兵隊が一体となって訓練していた姿が目には焼付いています。当時は、今の中野三丁目、五丁目、高円寺南五丁目、一丁目あたりは人家も少なく、田園風景で、子供の頃は母とつみ草をしたりしてよく遊んだことを覚えています。

一九二三（大正十二）年の関東大震災も中野で遭い、外で遊んでいた私は近所の軒下に^{たす}付んでいたところを、父の友人に助けられたことを覚えています。幸い、家は床の間の壁が壊れたり、家具が倒れた程度ですみました。夜になると、東京の空が真赤になって燃えているので、子供ながらも恐ろしかったです。幾日かたって、父が東京の方を見に行くといい、私も一緒に連れて行ってもらいました。他の事はあまり記憶にないのですが、浅草の十二階建のビルが倒れたところを見たり、殆どの家が無

く一面焼野原となって、亡くなった人を尋ね歩く人々の姿を見た時、本当に恐ろしかったです。

小学校三年の時、父の仕事の関係で飯田橋に移りました。四年生になるまでの約二か月間は、当時の飯田橋駅から中野駅まで汽車に乗って通学しましたが、これはとても楽しい思い出です。四月からは麴町区富士見町の富士見小学校に転校しました。富士見小学校は校舎はきれいだし、生徒も洋服を着ているし、音楽室もあってピアノで習い、それに比べて中野は随分田舎の学校のような気がしました。

一九二八（昭和三）年八月、母が子供を死産し、四人の子供を残して自分も亡くなりました。姉は女学校入学、妹は小学二年生、弟は来年入学という時で、父も大変困ったと思います。父と姉と妹が中野の大和町に住んでいたのです。一九三一（昭和六）年に大和町に移り、父も再婚しました。そのうち父の長兄が板橋にいて、板橋の駅の裏に広い家があるからと言われ、一九三六（昭和十一）年頃板橋に移り、東京大空襲で家が焼かれ

るまでいて、再度大和町へ移り、以後現在まで住んでおります。

私は学校卒業後、現在のJR（以前の国鉄）に就職し、改良工事の電気的设计及び計画を担当しておりました。太平洋戦争の始まる頃は東海道本線の複線化工事に従事し、東京駅の大改築工事から、品川駅までの建設を始めました。そのほか、新鶴見操車場、品川駅大改築工事をしているうち、一九四四（昭和十九）年に召集令状が来ました。私は二〇歳の徴兵検査の時は目が悪く、丙種合格だったし、電気の企画設計技術者だから、召集は来ないと思っていたところ来たのでびっくりしました。

皆から千人針と国旗に寄せ書きしたものをもらって、七月十九日千葉の鉄道連隊東部八六部隊に入隊しました。電気屋だったので無線通信の方にまわされ、毎日ツートンツートンとキイをたたく訓練を受けました。その他には、子供の頃に見た中野電信隊の訓練と同じような、通信柱を建て電線を引き延ばして、有線通信の訓練も行いました。戦争は、サイパン島での日本軍玉砕、レイテ沖海戦等での我が軍の不利な戦況等は聞かされていきました。

翌一九四五（昭和二〇）年一月中旬、我が部隊にも出勤命令が出されました。行先は幹部将校しかわからなかったのですが、口伝えにビルマ、タイに通じる泰緬鉄道の建設らしいとわかりました。一月十八日真夜中に千葉を出発、客車の窓は外が見えないようにブラインドが下ろされていましたが、隙間から見て

いると、成田、我孫子、田端操車場、新宿、品川を廻って東海道本線に入り、一月二〇日広島駅に到着しました。部隊名も線第一四五六部隊と変更され、宇品からの出航を待つ間、とりあえず仮宿舎として、広島駅と横川駅の間、太田川沿いにある楠町四丁目崇徳学園の校舎の一部を借りました。

インパール作戦、サイパン島での玉砕等で、出て行く船は無く、毎日のように広島駅北側の練兵場で簡単な訓練をしたり、比治山から宇品海岸までマラソンをしたりしていました。広島市街地を歩いていると、東京ではモンペ姿の婦人が多く見受けられたのに、広島ではモンペ姿は見られず、どこで戦争をしているのかと思うほど普段着の人が多かったです。

また、休日には、広島島の街中に出ても、軍人が多いので敬礼等に注意を払わねばならず、楽しくのんびりと散歩や食事をすることもままならないので、二、三人の仲間と一時間くらい先の田園の中の農家を訪ね、銀飯を腹一杯食べて、広い座敷で寝ころんで、のんびり休養をとることが一番楽しかったです。当時の広島の方々是非常に親切で、まるで自分の息子が遊びに来たように喜んで迎えて、お客様の待遇をしてくれました。

練兵場で訓練をしている時、二、三回低空飛行による戦闘がありました。機上掃射はものすごく、我々の持つ銃では戦闘機を落とすまではいかず、ただ物陰に隠れて、身の安全を守る事で精一杯でした。戦争が激しくなり、国鉄からの要請で、有線

の通信回線が障害を起し修理に人手が無いから、私達部隊に通信回線確保のための修理依頼があり、一時は山陰本線下松駅(山口県)の方まで出動したこともありました。また、私達無線小隊には、国鉄の駅で電信機を叩いていた者も数人いたので、国鉄駅の有線通信に応援にも行きました。

一九四五(昭和二〇)年八月六日も、有線回線が不通なので修理のため、買い出しに行くことになりました。朝方に空襲警報があったので一旦は避難したけれど、空襲警報が解除になったので、私以下十人で朝食後点呼も受けず、直ちに修理及び有線通信確保のため出動しました。横川駅に到着し、列車が来るまで皆で話をしたりしていました。何か飛行機のような音もするなど思いましたが、別に気にせず話を続けていたところ、一瞬フラッシュを焚いたような青白い、眩しい閃光が来て、追いかけるように、生温かい風が吹き通り過ぎました。

その途端、駅舎の待合室が倒れ、私は下敷になっておりました。幸い仲間が倒れた物をどかして助け出してくれたので助かりました。私は待合室の裏側にいたのですが、仲間は表側にいたので、強い光線を浴びて顔が爛れ、灰色になって誰が誰か解らないくらい皮膚が焼け焦げていました。幸い私は打撲だけでしたが、仲間は頭、腰、足などに怪我をしたり、血も出ていましたので、手拭で強く押さえました。

ちよっと横を向いたら、駅構内の石炭の山が一瞬のうちに火

となり燃え出していました。その時は何の爆弾だかわからない、再度爆弾が落ちるかもしれないと、頭の中はパニック状態で、安全なところに避難するのが一番と思いました。空を見上げると、ものすごい黒煙で、丁度キノコのような形でモクモクと高く上って行きます。瞬間何が何だかわかりませんでした。

駅前を見ると、家という家は全部倒壊していました。また、市電は焼けて車内の人は座席に坐ったままの姿で焼死していました。遠く近くで火の手が上がって、燃えていく炎が立っていたので、市街地は駄目、山の中に逃げた方がいいと仲間と話しました。仲間達も衣服はボロボロ、焼け爛れた皮膚でしたが、歩くことは差し支えなかったのです。山の中といえば可部線方面しかなく、行けるところまで行った方が良くと思い、道路を探して歩き始めました。

横川の街は商店街の家々が倒れ、倒れた家の下敷になった人々の「助けてくれ」という叫びがあちこちから聞こえてきました。しかし、我々も怪我人なので助けることも出来ず、申訳ないと思いつながら行き過ぎました。この時のことを思い出すと今でも心が痛みます。また、衣服がボロボロになった人が沢山おり、「水を下さい」といつて歩いてきた人々にも出会いました。

横川から山に入った時、雨が降ってきました。衣服を見ると、黒い物があちこちに付いているのにびっくり、黒い雨なのです。仲間の顔を見たら、黒いポツポツの顔になっているので、また

びつくりしました。昼過ぎ頃、原隊の者に出会いました。原隊では爆発の時刻に丁度点呼をしていたので、かなりの人が閃光を受けて亡くなったと聞かされました。

原隊でも安全なところといえば、やはり山間を走る可部線と考えたらしく、可部線の可部駅に近い可部小学校に避難するよう命令がありました。横川駅から可部まで約十八キロくらいあります。山道だし仲間が怪我をしているので休み休み歩き、可部駅には夕方着きました。小学校に入ってから、原隊から焼け爛れた人々が入って来ました。

特に喉、腕の裏側等柔らかいところが焼け爛れて、ケロイドになっていました。当時薬は無く、怪我をしたところにはヨードチンキ、焼け爛れたところにはゴマ油を塗るしか方法がありませんでした。ケロイドになったところは、丁度魚の鱗うろこのように固まり、その鱗のような皮をピンセットで一枚一枚丁寧に剥がしていき、その跡にゴマ油を塗っていく毎日の繰り返しでした。夏で暑い、その鱗のようになった皮膚に今度は蛆虫が湧く、皮膚が腐っていく、臭さが鼻をつく。食事は段々取れなくなり、毎日一人死に二人死に、一緒に被爆した仲間も一人二人と死んでいきました。生き残ったのは十人のうち三人くらいだったと思います。

そのうち八月十五日、ラジオで陛下より終戦のお言葉が放送され、聞きづらかったところもありましたけど、一同涙を流し

たきり話をする人もなく、ただ涙が止まりませんでした。八月二六日ごろ除隊の命令が出たので、二九日に除隊しました。

どうやって汽車に乗って帰ってきたのだろうか覚えがありませんが、帰りたい一心でした。出征当時の板橋の家は東京大空襲で焼かれて、両親は中野の大和町の叔母の家にいると聞いていたので、大和町へ帰って来ました。除隊の挨拶をした時、親は驚いて、「お前、足はあるのだろうか、まさか幽霊ではないだろうな」と言われたくらい喜んでくれました。広島に原子爆弾が落とされたのだから、死んだと思ったと言われました。久しぶりに入浴して生き返ったような気がしました。夜は久しぶりに家族と細やかなお膳でしたが、私には科亭のご馳走にも優るもので、楽しく嬉しい晩でした。

勤めもすぐに国鉄に復職して、電気工事の企画及び設計に従事し、上越線信越線などの電化工事を担当しました。遠くは青森、新潟と関東一円の電化工事、或は複線化工事、最近では東北及び山形新幹線工事も担当しました。

復員してから何が一番怖かったかという点、結婚することが一番嫌でした。それは遺伝的影響で障害のある子供が生まれるのが一番怖かったです。それでも周囲の人々から勧められるので、一九四八（昭和二三）年に結婚しました。結婚する相手に、私は広島で被爆したとはとても言えませんでしたが、翌年に長男が生まれるときは天に祈る思いでした。幸い元気な子が生

まれたので一安心しました。

一九五二（昭和二七）年には長女が生まれましたが、こちらも後遺症もなく本当に安心しました。子供達はすくすくと育ち、それぞれ大学を出て結婚し、孫達もそれぞれ三人計六人もおり、彼らも何の支障もなく本当に安心しました。

私自身は、復員直後は白血球が四千台と低かったりしたときがありました。その後は健康に過ごし、最近まで仕事も続けておりました。このことはとても幸せで恵まれていたと思います。

こういう悲惨な経験は、妻や子供達、ましてや孫達には話せません。依って人様の前ではなおさら話したくありませんでした。それでも何等かの形で記録を残しておくのが、生き残った者の義務と思っておりました。長広会を通じて体験を語る機会に恵まりましたが、それは二度と原爆被害を起こさせない為に役立つと思ったからです。今はひたすら被爆者援護法の制定と、全世界の核兵器の廃絶を願っております。



聞き書きを終えて

貴重な体験を話して下さった海老澤氏に、まず感謝申し上げます。と思います。今迄私は、前代未聞の希有な体験なのだから、他の人々に聞いてもらいたいと思うのが普通ではないかと考えておりました。それがお話を伺って、あまりに悲惨で心の痛む体験は思い出したもくなく、忘れてしまいたいものであると知りました。その一方で、後世のため、二度とこのような惨事を繰返させないために記録しておくことも必要と考えて、私達に語って下さったことは本当にありがたいことでした。

私は体験談を伺った後、八月中旬に思い立って広島へ行ってみました。十数年ぶりの広島でしたが、今回は、平和公園内を一人で歩きながら、また、原爆資料館の展示物を一つ一つ丁寧に見学しながら、以前とは違って何か厳粛な気持ちにさせられ、私自身ももっと積極的に核兵器廃絶の方向へ協力していかねばならないという緊張と決意を感じて帰ってまいりました。

鈴木陽子